HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	実践的・体験的学習から展開するキャリア教育を融合したこれからの高等学校商業教育に関する研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	髙橋, 秀幸
Citation	北海道大学. 博士(教育学) 甲第13977号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/78667
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Hideyuki_Takahashi_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名　髙　橋　秀　幸

学位論文題名

実践的・体験的学習から展開するキャリア教育を融合した
これからの高等学校商業教育に関する研究

論文内容の要旨

本論文は、これまでの高等学校商業教育について整理し、そこでの実践的・体験的学習に焦点をあて、その効果や商業教育における意義を明らかにし、これからの高等学校商業教育の在り方について考察したものである。

第１章では、高等学校商業教育の現状とこれまでの議論について整理した。商業高校の状況や学習指導要領、これまでの商業教育論、さらに他の職業学科の状況や、他国の後期中等教育やビジネス教育について整理した。その中で商業高校は、かねてから実践的・体験的な学習、資格・検定取得に熱心に取り組んできているが、生徒数や学科数の減少幅が大きく、その理由として、生徒の普通科志向や学習指導要領改訂による専門性の希薄化、なかでも他学科と比べて商業科が産業界や地域の要請に対応した変化ができなかった点に注目し、これからの商業教育への変化の必要性を示した。

第２章では、これからの商業高校ではどのような学びが求められるかを検討した。ここでは、高等学校において商業教育を実際に受けた卒業生にアンケート調査を行った。在学中に熱心に取り組んだこと、現在の仕事に役立っていること、さらにこれからの商業高校で指導すべきことを尋ねた。調査結果から、社会に出て役立つ取組は、情報処理（コンピュータ関係）とビジネスマナーに関する科目となり、これは、今後、商業高校で力を入れて指導すべきものと同様であった。これからの商業教育に期待するものとしては、勉強や検定学習と実践的・体験的学習という２つの面の充実が求められた。しかし、実際の学校現場では、すべての面を充実させていくのは時間的な制約からも困難である。そこで、これからの商業教育について検討を進めるうえで、今後のアクティブ・ラーニングや主体的・対話的で深い学びへの対応を見据え、実践的・体験的学習面の充実について検討し、どのような実践がよりよいのかを明らかにしていくことが、変化に対応する商業教育に貢献できるものと考えた。

第３章では、商業高校における実践的・体験的学習に焦点をあて、生徒の取組姿勢や種類による効果の差について検討した。ここでは、インターンシップと販売実習に取り組んだ商業高校の在校生にアンケート調査を行った。現在の商業高校では、様々な実践的・体験的学習に取り組んでいるがインターンシップと販売実習に着目し、それぞれの取組について熱心度・満足度・役立度や効果について分析した。結果は、両者とも熱心度・満足度・役立度で評価が高く、こうした実践には一定の効果があることが明らかになった。また、両者に共通した効果（働くこ

とにより社会を知ること、ビジネスマナーや礼儀を身に付ける、社会のルールやきまりを守る）に加え、インターンシップでは進路希望を具体化する効果、販売実習ではチームワーク醸成という特徴的な効果がみられた。このように、それぞれの取組によって効果が異なるならば、多くの実践に取り組んだ方がよいが、実際の高校現場における時間的な制約などから、それぞれの特徴を組み合わせた取組の開発や短期間の実践での対応が不可欠となる。

第４章では、短期の実践的・体験的学習から、その効果や継続性、商業科目との関係性について検討した。ここでは、短期的な実践事例として１日もしくは２日という短期インターンシップ（職場体験）を行っている商業高校の在校生に対して、事前、事後さらに体験１年後の卒業前の３時点でアンケート調査を行い、そこで生徒に影響を与えるものや効果継続性について考察した。その結果、体験直後はすべての観点で体験を肯定的にとらえているが、１年後には、その肯定的な影響の多くは薄れていた。しかし、将来への展望（将来について考えること）については、事前よりも卒業前の方で伸長がみられ、こうした特徴のある生徒は、事前に進路が決まっていないと自覚しているという傾向がみられた。このように、短期の実践であっても、将来を考えるための気づきやきっかけを得られるのであれば、意義があるといえる。さらに、効果継続性を考慮するならば、実践的・体験的学習に関連させ事前・事後指導だけでなく、継続した指導を行い、キャリア教育の要素を組み込んでいくべきであると考えられる。

第５章では、実践的・体験的学習の指導に取り組むうえで重視すべき点について検討した。ここでは、先進的に取り組んでいる商業高校の教員を対象に聞き取り調査を行った。結果は、実践的・体験的学習を生徒の学びの場・気づきの場として設定し、地域や企業との連携の場、自分で考え行動する場としてとらえ、これらを指導の基本概念としていた。また、発話から学びの確認、学びを深める、つながり、コミュニケーション、責任感と自信という５つカテゴリーを抽出することができ、教員はこれらを意識して指導していることがわかった。さらに、こうした教員が意識している内容について、各校の進学者率による違いがみられた。そして、こうした教員は検定指導などの学習面も実践指導の面もともに重視しつつ、生徒の進路を見据え、キャリア形成の視点も持ちながら実践の指導にあたっていることが明らかになり、商業教育とキャリア教育の関連が示された。

終章では、実践的・体験的学習を中心に据えた、これからの高等学校商業教育の在り方について検討した。これまでの各章の考察から、まず、これからの商業教育に求められるのは勉強・学習面の充実と実践面での充実であり、両者の往還ということである。どちらか片方ではなく、分野や科目を絞り込んだうえで、検定取得を含んだ勉強と実践を行き来しながら学んでいくということである。次に、商業教育とキャリア教育の融合である。これについては、高等学校商業教育の中にキャリア形成に関する科目（ビジネス・キャリア）を設置し、卒業後の進路指導を含めたキャリア教育の内容はもちろん、職業人生を歩んでいくうえで必要なビジネス・キャリア、そして人生そのものを見通したライフ・キャリアについて実践的・体験的学習を軸に展開するという新科目の私案を提示した。こうした実践的・体験的学習での学びを中心に、これからの高等学校商業教育を展開していくことで、独自の魅力を発信することはもちろん、生徒一人ひとりが自分の将来を考え、地域から求められる存在へと成長していくことが可能になると考えられる。

つまり、本研究の意義は、商業高校における実践的・体験的な学習にキャリア教育としての効果が含まれていることを実証的に証明し、このことを活用してこれからの高等学校商業教育を進めていくという一つの方向性を示したことである。